藤枝東高新聞
petit report

静岡県立藤枝東高等学校
新聞部（ＰＣ版）
平成25年10月25日発行
速報版
平成25年度
第２７号

東日本大震災発生から二年。
東北の今。私たちにできることは・・・。

新聞部ボランティアの塚本凜平（23ＨＲ）はボーイスカウトに所属している。塚本は夏期休業中にボーイスカウトの活動で岩手県、宮城県を訪れた。塚本がプロジェクトの一環で宮城県石巻市の被災地を視察したときのことを報告する。

①被災地視察を決意する。

私が所属する隊は、ベンチャースカウト二名でバディを組み「青春18きっぷ」を利用して東北地方を訪れることで、東北地方の文化や環境を学ぶというプロジェクトを計画した。「平泉中尊寺金色堂」と「石巻市沿岸」を目的地に設定した。私は初め、このプロジェクトに被災地の視察を盛り込むことについて非常に悩んだ。その最大の理由は、東日本大震災から二年半たった被災地が私たち、「本当の震災」を知らない者を受け入れてくれるだろうかというものだった。私たちの何気ない言動が被災者や被災地を傷つけてしまうことも十分に考えられるからだ。しかし、私には「本当の震災」を知りたいという強い思いがあった。私は写真部員でもあり、自分の見た東日本大震災を記録して周囲に伝えたいという考えもあった。そこで、私たちバディは被災地を視察することを決意した。

②在来線の長旅、東北の地を踏む。

JR藤枝駅より鉄道で移動すること十六時間。JR平泉駅で下車すると、冷涼で少し乾燥した東北の空気が長旅の疲れを癒してくれた。ひとつめの目的地である平泉中尊寺金色堂では日本の黄金文化を目にするとてもよい機会であった。中尊寺を出発した後に私は今までの道中には震災の爪痕がほとんど感じられなかったことに気がついた。この日の私はまだ、本当の東日本大震災を知らなかった。

③石巻市へ行く

翌日、私たちバディは石巻市へ向かった。JR石巻線は徐々に沿岸地域へと近づいていく。途中で何件かの仮設住宅を目にした。下車したJR石巻駅は仮面ライダーなどで有名な石ノ森章太郎氏の作品に登場するキャラクターで賑やかに装飾されている。震災当時、石巻駅ロータリーは津波により浸水したが、それを全く感じさせない様子だった。私たちは事前に調べた視察コースをたどり、日和山公園という高台を目指す。駅前の商店街で壁に亀裂が入っていたり、窓ガラスが割れていたりする店舗を何度か視界に捉える。一般家屋の一階で津波によって押し流された家具が当時のまま残っているところを見る。泥による汚れが激しかった。きつい傾斜を登ると日和山公園の展望台に着く。展望台に上がる前に「チリ地震津波碑」を発見した。私は石碑の最後の文を読んで冷や汗が出た。『はるかなる海底にねむる　万霊の冥福を祈るとともに常に心しよう　海難はまたやってくるということを』。チリ地震によって発生した津波は一九六〇年五月二二日にもこの場所を襲っていた。そして、約六〇年前の出来事が忘れられてしまっていたということに歯がゆさを感じた。展望台からは草原のようになった場所の所々にかつての住宅の跡が確認できた。すぐそこには海があり、この高台に避難してきた人たちがどんな思いでここに立っていたのかを考えると、とても胸が痛んだ。次に向かったのはこの高台のすぐ下にある石巻市立門脇小学校だ。タクシーを降りると、きつい臭いがした。がれきが水を含んで腐った臭いなのだろう。そして門脇小学校や周辺の様子も私の心を揺さぶった。最上階に設置された時計がサビている様子からは津波の高さが伺える。私は門脇小学校の写真を一枚撮ろうと思ったが手が震えてうまくシャッターが切れなかったことをよく覚えている。私は被災地に訪れる直前までたくさんの写真で被災地の様子を記録したいと考えていたが、被災地の様子を見て写真撮影を控えようと思った。本当に衝撃的な光景だったからだ。石巻駅までの道中で見た光景も忘れられない。あちらこちらの住宅跡地に供えられた花、住宅の壁に刻まれた津波の跡。ほんの数メートルの段差が被害の状況を大きく左右した場所…。私が2年半で得た東日本大震災の情報は、ほんの一部に過ぎなかったということを改めて痛感した。

震災前の石巻沿岸（日和山公園の案内板より）

現在の石巻沿岸（2013. 8. 14撮影）

津波による被害を受けた門脇小学校は足場が組まれていた。（下写真）隙間から確認できる火災の跡が当時の様子を物語る。（左写真）

④石巻の人にお話を伺う。

JR石巻駅前で観光案内をしていたボランティアの男性に「今の石巻の状況」と「被災者が本当に求めているもの」についてお話を伺った。男性は「まだまだやることはたくさんある。とにかく人手が必要。震災後はボランティアが多すぎて断るほどだったが、今は全然。震災後の3分の1にも満たない人数だ。がれきの片付けなど大きな仕事から小さな仕事まで、まだまだたくさんある。」と被災地が求めているものについて話をしてくださった。また、震災から2年半経ち、経済格差が出てきている。仕事が見つからない大人たちが不安定な精神状態であるため、子供が影響を受けている。震災そのものの精神的ダメージに加えて、これから自分たちが生きていく上での不安が新たに増している。中学生、高校生は転校した学校でうまくいかず、不登校が深刻な問題になっている。大人も子供も精神ケアが必要。これからも被災地は荒れていくだろう。まだまだこれから。今から頑張らないといけない。」と被災地の厳しい現状についてもお話してくださった。

津波により左腹部を失った自由の女神像

⑤被災地視察を終えた今

テレビや新聞で見た東日本大震災はほんの一部に過ぎなかったということを強く感じた。そして、震災直後は「がんばろう日本」という合言葉のもと復興支援を行ってきた日本だが、二年半経つと被災地ではない場所の人の気持ちは徐々に薄れてきている。私自身にも当てはまることがあり、現地で深く反省するとともに、一人の日本人として、これから静岡県でできる復興支援活動を必ず行い、被災地の人たちの力になることを、インタビューを受けていただいた方に約束した。この新聞を発行し、本校生徒たちに私の見た被災地の様子を発信することで、被災地の力になることを心から願っている。。

⑥今の私たちにできること

東日本大震災から二年半、私たちにできることはまだまだたくさんある。募金はもちろんのこと、静岡県でもできるボランティア活動はたくさんある。東北地方へ旅行することや、東北地方の物を購入することもまた、復興支援活動となる。東北地方の人たちが一日でも早く元の生活に戻れるように、私たち一人ひとりが行動することが最も重要なことである。

参考・三・一一復興支援情報サイト助けあいジャパン（復興庁連携プロジェクト）では今の私たちにできる東日本大震災復興支援活動を知ることができる。ボランティア活動の募集要綱や、被災地を訪れるときの心の構えなどを知ることもできる。被災地の現状を知るためにも是非、一度確認してほしいサイトだ。